

---

# きゅうすを擦ってみたら何か出てきた

悲劇のM

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

きゅうすを擦って見たら何か出てきた

### 【Nコード】

N8500E

### 【作者名】

悲劇のM

### 【あらすじ】

ちよつとやべーよ。何だよこのきゅうす。ちよつと擦ってみるべ。

俺は自分の部屋で、そいつと対峙していた。

今日、俺は誕生日を迎えた。家族で祝ってくれたのはまあ嬉しいかった。20歳つつても子供はまだ子供だ。祝ってもらったらそれなりに嬉しいもんだ。

んで、その誕生日には俺のおじさんも来てくれた。親父の兄さんなんだが、そいつがまた変人で、外国諸国を旅して怪しいものを集めてそれを日本で売る骨董転売屋をやっているらしい。詳しい事は俺おろか、親父も知らんそう。そんな変な人だったんだろ。

その人が誕生日プレゼントに、とくれたのが今俺の眼前にある黄金色に輝くきゅうすのような物だ。ピラミッドの最奥部で見つかりそうな凄みを放っているが、オッサン曰くラジオ会館エジプト支店で限定1つだったそう。エジプトにいつまで何してんだ、あのオッサンは。

あるアニメではこれとそっくりな物を魔法のランプと言っていた。だが、そのアニメのランプとこのきゅうすが同じ物とは思えない。ランプはアニメの世界のものなんだから。

そして、アニメではランプを擦ることによって変な魔人が出てきてた。そいで3つの願いを叶えていきやがったんだ。模造品らしいこいつでも、魔人とか出てきて2つくらいは叶えてくれんじやないか、と俺は思った。いや、逆に4つだ。俺の中の悪魔がそう呟いたが欲張っちゃあいけない。欲張って何も無かった時の悲しみは大きいから。よし、こいつはもとまたのきゅうすだ。魔人なんて出るわきゃねーだろ。いや、でも1つくらい。はあ、こんな自分が時々嫌になる。

つつても物は試してやつた。俺はきゅうすを擦ってみた。

「きゅうすよきゅうす、世界で一番美しいのは、どいつだあい」

いかんいかん、間違えた。それほど動揺していたというのか、俺は。こんなきゆうすぐとときに。くそう。恐るべし、きゆうす。

俺はもう一度擦ってみた。

「エクスペクトパトロナーモ」

また何を言ってるんだ俺は。そもそもこれ呪文とか必要ねーんじやねーのか。取扱説明書は無かったのかよ、オッサンめ。

説明書説明書説明書。俺が念じている間にきゆうすの口から煙がもくもく立ち上りやがった。守護霊の呪文凄い。よしっ、これ絶対何が出る。そして出てきたのは

「もゝ、あたしを呼び出したのあんた？ 用があるならさっさと言いなさいよ。あんたと違って忙しいのよ、あたしは」

おにゃのこでした。

エジプト貴族に人気ありそうな変な金の衣装を身に纏って、髪はちよつと長くてきれいだ。つーか可愛い。良い匂いもすつぞ。やべ、どうしよ。

だが俺は要らぬ感情を押し殺し、冷静を装った声で言った。

「おいおい、こういうの普通いかつい男の魔人が出てくるって相場は決まってるんだろ。なんだお前」

「何だじゃないでしょ、人を呼び出しておいて。それとこれきゆうすじゃなくてラン」

「まあいいや。お前、俺の願い叶えてくれんだよな？」

俺はそいつの言葉を途中で遮って、最も気になってたその事を身乗り出して聞いた。そいつは俺の期待を裏切る事無く言った。

「あら、察しがいいわね。何を隠そうあたしはランプの魔人。あなたの願い、三つまでなら何でも叶えてあげるわよ」

いやっほー。俺は目を輝かせた。だって願い叶うんだぜ。

「じゃあ早速、おふくろの病気を治してくれ」

そう、俺のおふくろは重度の末期癌だった。俺はそんなおふくろを見るたびに胸が痛かった。まあ、胸が痛かったなんて嘘だが。

「珍しいわね。今まであたしを呼び出した奴らは皆私利私欲な願い

事だったのに、母親の為だなんて」

「どうやら魔人でも人の心読むのは無理らしい。魔女だろうが魔人だろうが心読まれるのはいかな。ホントにいかな。もしそういう奴らがいたら絶対俺の心だけは読まないでくれ。」

「ってなこと言ってるうちに変な動きしちゃってます。エビゾリ+アシカの姿勢つっても読者には伝わらんだろうなあ。っーか何気にエロいぞ。ほんとに何なんだコイツ。」

「エクスペクトロパトローナモ」

「お前も守護霊呼んでんじゃねえよ」

「ふう、これでああなたの母親の病気は全快してるはずよ」

「あつそ、ばんざーい」

マジで叶えたのかよ。くそつ。そんな思いを胸にしまい込んで偽りの笑顔を浮かべる俺の頭に、おふくろの顔が浮かんだ。最後に見舞いに行った時、こんなこといつてたなあ。

『母さん、早くあんに仕事つけてほしいんだけどねえ』

高校卒業して2年の間、プータラしている俺に優しく言ってたっけ。丁度いいや。前から興味ある仕事があったんだ。

「よし、2つ目の願いだ。俺に仕事をくれ」

「どんな仕事がいいの？」

「俺ね、第一志望もともと声優だったんだ。是非とも釘宮さんと共演してアニメの中だけでも罵りたい」

「ああゝわかった。京アニスタジオ行ってこい。仕事くれる筈だよわああつ、腐ったものを見る目だ。」

「わーい、ばんざーい」

「で、最後のお願いは？」

俺の頭に、また母親の顔が浮かんだ。こんなこともいつてたなあ。

『母さん、はやく孫の顔が見たいよ』

「俺の子を産んでくれ」  
「デメエ一回死ねえ」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8500e/>

---

きゅうすを擦ってみたら何か出てきた

2010年10月8日15時12分発行